

特集 「意識とメタ過程」

心と記憶力

—知的創造のベルクソンモデル—

Mind and Memory — Bergsonian Model of Intellectual Creativity —

平井 靖史
Yasushi Hirai

福岡大学人文学部
Faculty of Humanities, Fukuoka University.
hiraiya@gmail.com, <http://matterandmemory.jimdo.com/>

Keywords: philosophy, Bergson, memory, creativity, consciousness.

1. はじめに*1

ベルクソンの記憶力理論といえば、教科書的には、現在タルヴィングによって定義され心理学で用いられている手続き型記憶とエピソード記憶に相当する区別の先駆者として知られている。ベルクソンは反復学習に基づく前者を「運動性の記憶」, 「習慣記憶」と呼び、後者を、経験の履歴を自動保存するという意味で「自発的記憶力」, あるいは「純粹記憶力」, 「独立的記憶力」などと呼んでいる。

単に2種類の記憶力があるというだけでなく、両記憶力は連携している。学習効率の例を紹介しよう。人間の技能習得は、単なる反復学習にしては際だって素早い。それは、学習の各試行において、お手本を保持するもう一つの記憶力を参照できるおかげだということである。「この能力〔後者の記憶力〕のお陰で、同じ状況が偶々反復して随伴運動が習慣へと組織されるのを待たなくてよい。移ろいやすいイメージを用いて、これを置換する安定したメカニズムを構築するのだ」(強調引用者, MM, 91*2)。こうしたハイブリッド型記憶とはほぼ同じ着想で、2016年にGoogleのチームがディープラーニング

型の人工知能に別立てのワーキングメモリを備えさせ、著しい学習の改変を示したことは記憶に新しい [Graves 16, Vinyals 16]。

だが、ベルクソンの記憶力理論には、こうした学習場面への適用に留まらない、我々の心ないし知能の働き全般について抜本的な捉え返しを促す深い射程がある。本稿で示したいのは、そこである。ベルクソン哲学の最大の特徴は、時間構造から心の哲学的な諸問題にアプローチする点にある。その議論の主要な部分は、主に第二主著『物質と記憶』(1896)において展開されているのだが、あまりの難解さのため、少数の卓抜な例外を除いて、これまで体系的な解釈は遅々として進んでこなかった経緯がある。多くの理論家達に、ベルクソンの心の哲学がなじみ薄いのはそのためである。依然として未解明の論点は残されているものの、2015年以降 Project Bergson in Japan (PBJ, 本稿*1参照)では、哲学に留まらず意識の諸科学や関連諸分野の多くの知見を結集し、学際的・国際的な共同研究を通じた集中的な解明を行って一定の成果を得たので、人工知能研究に資すると考える範囲で、その一部を紹介したい*3。

ベルクソン哲学を心の構成論的モデルとして読んだとき、その特徴は

1. 〈意識の遅延テーゼ〉: 進化論的スケールで、生物システムの時間的変形から心の発生を説く
2. 〈心は過去でできている〉: 蓄積された過去を素材として、心という内的構造体が経験を通じて立ち上がる
3. 〈記憶イメージ投射による認知〉: たえず変化する内部状態を独立的に保ち、それに基づいて世界を再

*1 本論文は平成 27 ~ 29 年度科学研究費補助金・基盤研究 (B) 「ベルクソン『物質と記憶』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の確立」(課題番号: 15H03154) および、これを財源とする PBJ (Project Bergson in Japan 2015 ~ 17) の成果を含む。PBJ では国際的な連携のもと、ベルクソン哲学の体系的な再読解を進めており、その成果を [平井 16a, 平井 17a, 平井 18a] として刊行している。ホームページは <http://matterandmemory.jimdo.com/>

*2 『物質と記憶』からの引用については、便宜のため慣例に従い MM の略記の後に仏語原典 puf カドリージュ版の頁数を添える。以下の複数の邦訳がこの原著頁を付しているため、邦訳からも参照可能である。岩波文庫 (熊野純彦 訳)、および駿河台出版社 (岡部聡夫 訳)。

*3 2018 年刊行予定の『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する』には、三宅陽一郎氏および谷 淳氏 (OIST) の論考および平井との鼎談を収録している。

構成することから、認知が敏感に変化し得るものとなり、またそれに応じて行動も多様化する

- 4. 〈記憶の多次元動的ダイナミクス〉：そこで用いられる記憶が、スケールやスコープの取り方を変えられる柔軟さを持ち、それが知的創造性をもたらす

といった点にある。ベルクソンの用いる「記憶」は、経験や概念を含む最も広い意味で用いられており、現在の外部刺激からくるのではない、すべての過去由来の情報リソースのことを指すことに注意されたい。以下、順に説明しようと思う。

2. 意識の遅延テーゼ

我々の意識経験を考えるための対比項として、ごくわずかな数の刺激-反応の決定論的カップリングしかもたない基礎的な生物を仮定する。こうした生物において、受容された刺激は、あらかじめ定まった反応行動へと受け渡される形で処理される。ここで出入力は単なるマッチングの作業でしかなく、知覚は、我々におけるような対象の描出といったものにはほど遠い。刺激は、既存の行動レパートリのうちから一つを起動する単なるトリガーとして役目を終えるものでしかない。純粋に有用な機能性においてだけ成り立つ知覚である。

我々人間においては事情が異なる。我々は単に刺激を受動的に識別する*4だけでなく、内部情報（記憶）を利用して積極的に再構成する。刺激は直接的な反応行動へと受け渡されて身体内部を通過していきってしまうのではなく、代わりに滞留し、その輪郭を描き、内部的に再構成する作業に貢献することとなる。ここで初めて対象は、我々にとって内的に志向的「対象」として現出することになるのである。

前者のような、決まった刺激応答だけを繰り返す生物においては、確かに特定の刺激への選択的な反応は生じてはいるが、それはその生物が内的に志向的对象として捉えていることを意味しない。ちょうど自動ドアのセンサーや冷蔵庫のサーモスタットがそうでないのと同じように。

生物を環境との出入力の「システム」として記述し、以上のような知覚構造の違いを、刺激に応答する一連の情報の運動が当該の生体システムの時間次元をどのように構成するかという点に着目して捉えるのが、ベルクソンのやり方の特徴である。それは、特徴的な動詞表現に見取れる。

*4 身体の反応可能性のレパートリを反映するものとして、すでに初次的なカテゴリー化がなされていることになる。これはある意味で一般性であるが、思考される知的な観念ではなく、生態学的に成り立つという意味で、「生きられる類似」とベルクソンは呼んでいる。このカテゴリー化は、異なる知覚刺激に対する反応行動の同一性から来るもので、例えば有限な種類の行動レパートリしかもたない生物にとって、世界はその数のカテゴリーに区別される。

例えば、前者のタイトカップリング的な知覚においては、刺激が反応へと「引き継がれ (prolonger)」るだけで、身体（その神経中枢）をただ「通過」し、対象から「遠ざかる」。これに対し、後者のような志向的对象の認知では、その運動は「引き留められ」、対象の描出へと「引き返す」といった具合である。以下の引用で、「自動的再認」は前者、「注意的再認」は後者を指す。

注意的再認もまた、運動から始まる。ただし、自動的再認においては、知覚は有用な効果を引き出すだけ引き出されて運動へと引き継がれてしまうため、我々は知覚対象から遠のくことになるのに対し、注意的再認では反対に、運動は我々を対象へと連れ戻し、その輪郭を強調することに充てられる。ここから、記憶イメージが演じる、もはやおまけとは言えない重要な役割が出てくる。運動が実践的な目的を放棄して、その運動性の活動が、知覚を有用な反作用によって継続する代わりに、道を引き返してその顕著な特徴を描くのに用いられると想定してみよう（強調原文、MM, 107）。

つまり、対象の内的な再構成を伴う認知への転回が成立するためには、生物功利性に拘束された、時間的にタイトな「速い」感覚運動システムではダメで、ある程度の時間的迂回（遅延）を許すようなゆとりある時間的延長が不可欠であるということだ。この遅延は、だから単に観察される反応運動のペースのことではなく、知覚刺激と反応行動の間のカップリングが、どの程度決定論的であるか否かに対応している。

入ってきた知覚刺激が対応する反応行動にリレーされるだけの知覚と、対象としてイメージ描出されるような知覚とは、以下の三つの点で質的に異なる（図1）。すなわち、①入力刺激が有用な身体行動に「引き継がれ」、「消尽」されてしまうことなく、少なくとも部分的には身体（脳）内に滞留することを許すような時間規模を生体システムがもつこと、②対象の内的再構成に利用されるような経路をもつこと、③そして、その内的再構成には、それを非決定論化するリアルタイムの変動要因（時点に

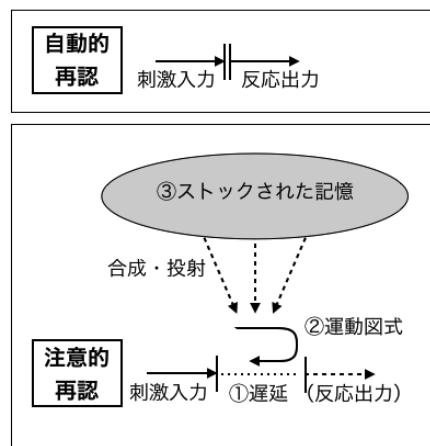


図1 平井による模式図（二つの再認）

依存する)が入ってくる。この最後が記憶である。②と③については、後の節で見ることにし、ここではまず①の遅延の論点から見ておく。

生体システムの時間的変形により、生物は単なる物理的な連鎖反応の時間の流れからデタッチする。そして彼によれば、この「物質のリズムからデタッチする」(MM, 236)ことが自由な意識の条件である。

さて、この時間的変形は、比較生物学的知見に基づいて主張される。曰く、基礎的な生物では、刺激と反応のカップリングはほとんど固定的・必然的とみなせる。原始的であればあるほど、知覚は行動と文字どおり切り離せないようになっている(ベルクソンは棘皮動物の管足、腔腸動物の刺胞など、そもそも器官レベルで未分化な例もあげている(MM, 28))。

原核生物でも見いだせるような「外的刺激物から影響を被り、これに対して力学的・物理的・化学的な反応でもって応答」(MM, 24)するという仕組みは、有機体の系列を上っていくにつれて「生理学的な分業」(MM, 24)を果たすようになり、特に神経細胞が登場すると、「それらは多様化し、グループごとにシステム(系)をなす」(MM, 24)ことで、「外界からの刺激に対する動物の運動反応は、より変化に富んだものになり、ひいては受け取った刺激が運動遂行によって直ちに引き継がれない場合も出てくる」(強調引用者, MM, 24)という*5。[兼本16]を参考に模式的に示したのが図2である。

身体の複雑化と機能分化に伴うスループットの遅延は、生体システムに「時間的な内部」を生んだ。これが

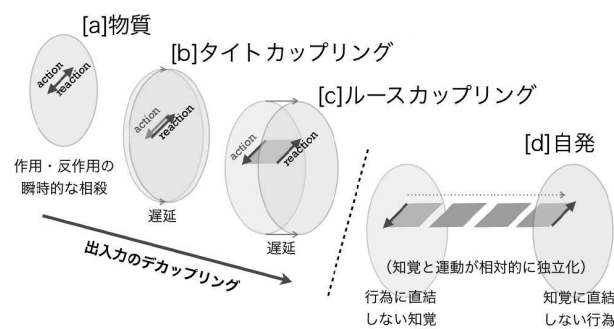


図2 ベルクソン意識の遅延テーゼ

*5 なぜ分業が、組織全体としての遅延をもたらすのかについては解釈を補う必要があるかもしれない。三宅陽一郎が指摘するとおり、これが単に処理ステップの多さからくる累積的な遅延でしかないならば、それが意識の成立要件になるとは考えにくい。おそらくここで重要なことは、分割された各経路での処理が別々の時間スケールで行われており、包括的なクロックによって同期されていないため、すり合わせの段階では待ち時間を大きめにとっておく必要があるという点である。その興味深い例は、太田宏之が論じている大脳基底核である。ミリ秒のスケールでなされる各皮質グループの処理が、最終的に流れ込む大脳基底核は、より大きな受付時間で挙動するようになっている。この時間的バッファによって、持続の多様性は丸め込まれるようになっていくのだとすれば、この時間圧縮が「凝縮」(*7参照)として機能している可能性があるからである[太田13, 太田17]。

「意識」(具体的には感覚質、時間経験、焦点化といった意識の基礎的な諸事象)の発生条件となった、というのがベルクソンの〈意識の遅延テーゼ〉*6である。

生物として存在するということが、何らかの膜などにより「内部」をもつということであるが、ベルクソンの目の付け所は、空間ではなく時間的內部に着目したという点である。実際、「事物」ベースではなく「作用」ベースで観察するベルクソンの見地からすれば、生物は空間的には開かれたシステムである。だが、反作用の遅滞は、生物に時間的に相対的に自律した領域を拓く。ここから、異なる持続のリズムをもつ二つのシステム(生物と物質環境)が空間的には接続されている状況が成立する。この時間スケールギャップが、意識そのものの原初的な発生の場面であると考えるのが、彼の着想のオリジナルな点である*7。

3. 心は過去でできている

さて、このように確保された時間的延長(遅延)において、「対象」の「描出」という作業が可能となる。現代で言うなら皮質の感覚野ループにあたるが、ベルクソンはこの局面で、単に対象の特徴抽出・分節化(②)が行われるだけでなく、記憶イメージの再利用・投射によって対象の積極的な描出がなされると論じている(③)。上にも述べたように、ベルクソンは我々の認知に用いられるいわゆる一般概念や意味も、経験由来のものと考え、「記憶」の名のもとに総称している。つまり、(過去を想起するときではなく)我々が普通に人の話を聞いたり、日用品や風景を見たりする場面にこそ、記憶の「もはやおまけとはいえない枢要な役割」(上記引用)があると述べているのである。

環境からの知覚刺激に適切な身体反応運動を返すことは、すべての生物が行うことである。反復による単に受動的な学習なら、これも多くの生物が行うことである。しかし、単に運動的なものでない記憶を有する我々には、蓄積された過去のリソースが膨大にある。この「独立的記憶力」を活用して、世界を能動的に再構成するようにして認知する点が、我々の最大の特徴であると、ベルク

*6 一点誤解されやすい点にコメントしておくことにしたい。リベットや、そのほかのいわゆる受動意識仮説でも、遅延が論じられる。注目している事象は同じでも、その理解に見逃せない違いがある。ベルクソンにとって意識は、身体(脳)の内部処理の一定の遅延「の後」に生じる、というのではない、その遅延にわたって、言い換えればその時間間隔として、成立するというのである。ここで、意識の現在が見掛けではない時間幅をもつとするデントンの「延長主義」が重要となる。間隔としての時間(持続)そのものが、意識そのものの質料として捉えられているからである。時間経験(持続)は意識にとって、偶発的なものではない。意識は文字どおり、この遅延された時間によってできている。[平井18b]を参照。

*7 時間スケールギャップによる「凝縮」から感覚質の現れを説明する。このテーゼは、PBJ 2015 ~ 17の争点の一つとなった。特に[平井16b, 岡嶋16b]を参照。

ソンは考えている。つまり、我々の認知は、外界からそのつど受け取る知覚刺激だけからなるのではなく、手持ちの過去由来のリソース（記憶イメージ）を大量に投入することで構成されている。

知覚は、現在の対象と精神の単なる接触ではない。

知覚は、これを補完し解釈する記憶イメージによってすっかり浸透されている（MM, 147）。

さて、経験の蓄積はバックグラウンドで絶えずなされる自発的な働きであるから、放っておいてもこのリソースは時間の経過とともに絶えず増大する*8。しかし単に量的に増えていくだけの情報は役に立たない。記憶の全体はシステムをなし、内部的な編成・再編成をつねに繰り返しているとベルクソンは考えていた。日々の経験は、ただログとして時系列的に保存されているだけではなく、その諸要素間の類似連合や近接連合などに基づいて多次元的なネットワークを構成する（図3, 5章にて後述）。実際、この記憶が再認に用いられるのであれば、形態素や意味素の必要に応じて縦横無尽に検索・取得できなければ意味がないだろう。したがって、時点が異なれば、利用される過去の総体は質的にも量的にも変わる。

さらに、その場その場のリアルタイムでも、必要に応じてその編成はダイナミックに変えることができる。これが、我々の認知の敏感な可変性と柔軟性、つまり非決定性をもたらしている。「同じものを別様に見る」ということは、我々の知的創造性の根幹をなす。見慣れたもののうちに気付きがあるのは、後から追加されるような機能ではなく、我々の認知の本質的な仕組みの部分に組み込まれている、ということだ。メタファーやメトニミーを含む言語理解も、連想も着想も、この内部情報の織りなすシステム編成の多様性に起因している。

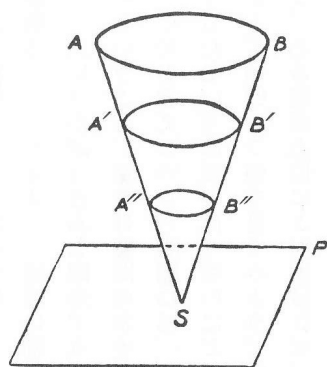


図3 ベルクソンの記憶の逆円錐（MM, 181）
底面 AB が時系列保存された状態で、例として描かれた A'B' 面、A''B'' 面は、「同じ記憶の総体」が、別なスケールと秩序において再アレンジされたものを示す。この「記憶の諸平面」には無数のバリエーションがあるとされる

とすれば、一般に「心」と呼ばれているものは、現在の環境との感覚運動的な相互作用の流れの背後にあって、これに立ち会い介入する、絶えず変転していくこの「過去の総体」*9 のことにほかならない。「心をもつ」とは、まずは、現在知覚をただ通過させるのではなく、経験に由来する内部情報に基づいて積極的に再構成するようにして世界を認知し得る、ということであり、そのような時間構造をもつものへと生体システムが変容する、ということだ。記憶を素材とするということは、心はア・プリアリオリに与えられたものではなく、時間の経過とともに、上のようなネットワークの組織化によって一つの「異質的多様体 *multiplicité hétérogène*」*10 として立ち上がるということである。

4. 記憶イメージ投射による認知

自らの過去経験から認知リソースを大量に投入して経験を構成すると述べたが、単に概念や思想が認知に反映されるという理論負荷の話をしてしているのではない。ベルクソンは、我々の現象的経験の、文字どおり図画的な描出のレベルから、認知的構成を語り起こしているのである。ベルクソン自身は、「対象そのもののディテール」（MM, 115）を記憶から投射する、という言い方をしているが、具体的には、事物や風景の典型、表面のテクスチャなどを考えればよいだろう。例えばペイズリー柄のシャツや木目の机が目に入ったとき、我々の眼は、その模様や曲線をいちいち拾ってボトムアップに描出しているのではなく、特徴を拾い読みして大まかな判定ができれば、残りは手持ちの記憶からペイズリーや木目調の画像を適当に編集して貼り付けている、というわけである。かくして、生彩に満ちた光景が、各人の現象的経験としてもたらされる。この投影作業を通じて、我々は知覚を単なる物理刺激の集合ではなく、自分固有の体験たらしめている。

今ペイズリー柄の例をあげたが、初めてペイズリーを見た場合は、見慣れたものと同じようにはいかない。「運動図式」（後述）は、まだ要領を得ないから、そこにコストと時間がかかるだろう。同じ知覚光景内でのこうした遅延のばらつきは、現象経験のうちに異質性として現象するだろう（幼児や旅行先における知覚）。逆に、なじみの生家を眺めるとき、その知覚を覆う、えも言われぬ独特の感じは、浸透的に混入する多量の非明示的な記憶から来るはずで、隣に連れてきた初訪問の人物に見えている同じ家とは、入力された物理刺激としては同じでも現象内容として全く異なっている。

*8 これは「過去の自動保存説」と呼ばれ、時間の哲学の観点からは極めて重要な争点を含みもつが、ここでは掘り下げない。[平井 18a] 所収の平井論文を参照されたい。

*9 ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』（合田正人、平井靖史 訳）ちくま学芸文庫、p. 205（2002）。MM, 162 も参照。

*10 ベルクソン前掲書で中心的に用いられる概念。

さらに言えば、この知覚の仕組みから「錯覚も生まれる」(MM, 30)とされているのも興味深い。ミュラー・リヤー錯視や、エビングハウス錯視など、子供では相対的に生じにくいとされるが、それは多くの錯視が経験に基づいた(本来は利便のための)「イメージ補正」から来ることを考えれば、もっともなことである*11。

したがって、この再構成においても、現在の感官からの入力刺激から得られる成分と、自前の記憶からのもち込み分との区別がある。認識の理論として見たときに興味深いのは、我々の現象的知覚を、素朴実在論のように100%実在物からなるとも、観念論のように100%主観的構成とも考えない、アマルガムとして捉える観点である*12。これをベルクソンは、②受容された刺激の連続体から特徴抽出によって対象の輪郭を切り出すプロセスと、これを補完する③記憶イメージの合成・投射による描出という二つの局面に分けて論じた。前者(②)を「運動図式」と呼んでいる。そして、素材の面から言えば、後者の比率が圧倒的に高いと言う。ちなみに近年の知見によれば、一次視覚野に入る神経のうち、網膜から来るものは3~4%とのことである。それ以外は、脳皮質の別部位からの入力ということになる*13。

実際には、知覚であって、記憶が浸透していないものなどない。自分の感官の現在の直接所与に対して、私達は、自らの過去の経験からその膨大なディテールを混入している。ほとんどの場合、この記憶が知

覚を置きかえてしまい、この知覚からは、古いイメージを喚起するためのいくつかの指標、単なる記号だけを引き留めておくにすぎない(MM, 30)。

毎瞬間、過去のイメージは現在経験を補完して、これを獲得経験によって豊富化する。……その実在的直観(これはいわば瞬間的なものである)は、我々の記憶がそこに付け加えるものに比べれば取るに足らないほどわずかでしかない(MM, 68)。

さて「運動図式」の仕事は、身体を取り巻く連続的な物理刺激の海の中から、「顕著な」(MM, 123)あるいは「最も頻繁な」(MM, 106)特徴を拾い出すことであり、その際、「利便と迅速さ」(MM, 30)のために「他の可能な運動から識別するのにちょうど十分なだけの」(MM, 123)徴表を抽出することとされる。だから、ここだけ見れば、現在の人工知能の画像認識によく似ている。だが、すでに述べたように、これは残りの細部を記憶の投射で補完することを前提とした、その意味で「図式的」な「素描」、「下書き」としての特徴抽出に過ぎない。

しかも、より重要なことだが、これら対象の諸特徴は、同時にバラバラに検出されるのではない。ベルクソンは、知覚空間に散らばるこれらの諸特徴を、「模倣運動」ないし「運動傾向」によって「辿る」、「なぞる」、という表現を用いている。つまり、対象を、内的にリハーサルすることによる素描というものを考えていた。ここにも彼の時間論的着想を見て取れる。驚くべきことに、彼は現実の四肢の運動ではなく、脳内の模倣運動というものをすでに想定して、「発生状態の(naissant)運動」という表現を案出し用いている。我々は写真のように一括的に知覚するのではなく、たとえ対象が静物である場合でも、狭い注視点を絶えず動かして、対象の組立てを運動的同調によって内的に再現する。音楽経験があるから聴覚の場合はわかりやすいだろうが、視覚も同様で、我々は視野全面を片っ端から走査しているわけではない。

これは、デジカメに対して我々の眼が単に劣っているということではない。このような動的な特徴の拾い出しが、第一に、そのまま注意(主題化)の仕組みの基礎となるからである。第二に、内的運動に内部感覚が伴うことで、外界へのコミット感、世界のリアリティに対する接地感のベースにもなっている。「なじみの感じ」(MM, 101, MM, 103)が再認の基礎にあるのは、このためである。ベルクソンは、視覚失認(当時は「精神盲」と呼ばれていた)や、外国語のリスニングといった、これが欠損したり未発達な事例から逆算することで、この「運動図式」という機構を導き出している。例えば、ある種の言語失認においては、言語の記憶自体は無傷であっても「文字の動きとでも言うべきもの」(MM, 106)が失われることによって意味理解が阻害され得るわけである。

さて、その名のとおりに、この脳内の「運動図式」は、身体技能と同様、運動性の習慣記憶(手続き型)の一種であるから、反復によって習熟もするし、経験を重ねれ

*11 そもそも、いわゆる真正な知覚においてもほとんど記憶でつくった幻覚を見ていることになるが、真の幻覚との違いは、その素材ではなく、投射される記憶が知覚にどれだけ適切にフィットしているかの違いでしかない(ここで重要な橋渡しの役をしている「運動図式」については、すぐ後に触れる)。

*12 つまり、外来の物理成分と記憶由来の成分の複合からなる「注意的再認」は、まず、素材に関してハイブリッドであるということが出来る。さらに、この遅いがリッチな「注意的再認」と、進化論的に古い、速いが単純な「自動的再認」の二経路が一つの人間個体のうちで補い合って共存しているという意味で、プロセスのレベルでもハイブリッドである。この点については[デントン 17, 平井 16b]を参照されたい。グッデイルらの二重知覚システム仮説では、一次視覚野からの腹側と背側への二経路への分岐が論じられているが[Goodale 92, Milner 95]。首視研究においては、一次視覚野の手前に上丘で分岐して運動へと直結する経路が示されている[Yoshida 15]。そのほか、意思決定についても二重プロセス説([スタノヴィッチ 17]や[カーネマン 14])などが提唱されているが、ベルクソンの指摘が正しいければ、重要なのはこのように異なる時間スケールの処理が併走的に混在することで、時間スケールギャップを同一個体内で多く生んでいるという点である。

*13 念のため述べておけば、ベルクソンは記憶に関して、脳で説明できる側面とできない側面を適確に見分ける必要があるという立場である。痕跡としての情報の蓄積やその組織化といった機能面は説明できても、「素材ギャップ」や「通時的保存」の問題は説明できない。電気刺激が脳を通ったからといって、「そこで事物の(心的)表象へと変身する奇跡の力をくみ取るなど」ということは、私には意味がわからないし、永久にわかる気もしない(MM, 25)。ベルクソンが記憶を神経表象に還元されないイメージの存続と考えたのはそのためである。記憶と意識の問題がまさに経験科学と形而上学の接点にあることを彼は見据えていた。本稿では問題の哲学的側面を意図的にオミットしている点を重ねて述べておく。

ばある程度安定する。聴覚が健常で、かつ語学上の知識はあっても、「耳を慣らす」ことができていなければ、外国語の聴取りは成功しない。手持ちの記憶を投射して解釈しようにも、何をどのように投射すればよいか手掛かりがないからである。脳内運動によって対象の簡素な内部モデルをつくるのが、再認の身体的土台をなすと彼が言うのは、それゆえである。

5. 記憶の多次元ダイナミクス

記憶イメージ(③)の出番は、ここからである。こうして運動的な仕方で素描された対象の特徴のセットは、虫食いであり、まさに「下書き」である。これを手持ちのイメージ素材で(語の二重の意味で)「適当に」、塗りつぶしていくことで、我々が心的に経験する知覚世界は出来上がるとベルクソンは論じる。これは一見作業コストが高いように見えるが、ものの見え方自体が経験によって深まることや、その浮動性を確保するために、不可欠な仕組みである。

記憶の投射は、4章で見たような現象的知覚の描出で終わるものではなく、対象の意味理解(一般観念)のレベル、ひいては文脈や背景的な知識に至るまで、多層的な仕方で展開される。したがってこのとき利用されている記憶は、すでに触れたように、出来事単位で時系列に並んだまま固定されたものではなく、さまざまなスケールと秩序において臨機応変に取出し可能なものでなければならない(とはいえ、我々の世界は幸か不幸か大局的には安定しているから、放っておけば、投射はそのうち安い反復作業へと収束していくだろうが)。

言語的な意味を司る一般観念については、『物質と記憶』の第3章できわめて興味深い議論が展開されているのだが、ここでは簡単に触れるに留めよう。知性的な諸観念(その多くは必ずしも具体的事物に対応しない)といったものはどこからくるか。そうしたものを手にするためには、経験由来のイメージ記憶群に対して、ある程度恣意的・自律的な操作(和や積をとるなど)を施せる必要があることは予想できる。実際ベルクソンは、ストックされた記憶に対して「反省的分析」(MM, 176)を施すことで、多様な一般観念が析出されると述べる。こうして組み上げられた「人工的な運動装置」(MM, 179)、その「メカニズムの総体」(MM, 179)が分節言語とされる。この意味で、言語もまた、記憶力の多次元的な再編可能性の発現形態の一つであり、上に見た感性的なイメージ操作と母体は共通である。これは、我々の言語運用が思うほど「記号主義」的でなく、さまざまな感受的広がりへと地続きに開かれていることを意識させる論点である。

ベルクソンは、この再編可能性を想起の場面でも再認の場面でも強調する。想起の場面で具体的に示しておこう。記憶は常に再現動画のように喚起されるわけではな

い。同一の記憶のセットから、さまざまなグループ化とスケールにおいて取り出すことが可能である。特に重要なのが、一つの記憶要素が一つの再現される記憶に固定的に対応するのではなく、複数の要素を凝縮して一つの記憶として再現する可能性、そしてその可変性に開かれているという点である。これをベルクソンは、記憶の断面の拡大と縮小という形で表現している(図3)。

例えば、特定の旅行の一場面を再現フィルムのように想起する場合もあれば、その旅行全体をひとまとまりとして、あるいは「中学時代」、「高校時代」などというかなり長期的なスパンを一つの印象として取り出すこともできる。そのスケールは一連の想起プロセスの中で随時変更することも可能だ。例えば、ふと話題が高校時代に触れたとき、全体の淡い感情(その正体は3年分の記憶の総合である)が私を覆うかもしれない。しかしただちに「ある特定の会話」の場面が立ち現れ、また今度は「3年生の2学期は特に悩ましかった」という具合に遷移する。同じ記憶を前にして、スコープの取り方を随時変更でき、そのつど異なる凝縮・総合が異なる質感をもたらす。しかも、これは時間的近接だけの話ではない。例えば、ある外国語の単語が、時にはその外国語一般のことを、別な場合には、それを発した友人の発話(個別エピソード)を想起させるという事例をベルクソンはあげている(MM, 188)。つまり、類似ベースのスケール変更も可能である。形態レベルの類似だけでなく、運動パターンレベルの類似、意味的な類似など多様な軸を取り得ることはもはや多言を要すまい。ベルクソンは記憶の逆円錐の「並進」と「回転」について、詳細な展開は同書の枠を大きく超えるとして『物質と記憶』では詳論していない。

だが、逆円錐の上下(拡張と収縮)を行き来できること、同じ記憶群からなるセットが、無数の異なる秩序のもとで再現可能であることには、大切な射程がある。というのも、再認に用いられるのも、この同じ記憶であるからだ。この記憶の敏感な変形可能性のおかげで、固着した世界像は揺さぶられ、同じものをいつもとは別様に見るといふ決定的な経験が可能となっているのだ。

6. 知的創造性

ここで、創造性の論点に接続する。すなわち、イメージ記憶はただ惰性的に投射されているだけでは、既知の概念型の押し付けという形で、むしろ我々の認識をバイアスで固め、縛るものとして機能してしまうものでもあり得る。だから、ベルクソンの記憶にとって柔軟な再編可能性に開かれていることが重要な点だ。現に、ベルクソンは、再認においても同様の図を描いている(図4)。

この記憶力はその柔軟性のゆえに無際限に拡張されることができ、対象に向けて、対象から示唆されるますます多くの事柄を反射させる。それはある場合に

は対象自体のディテールであったり、別な場合には対象の解明に寄与し得るような付随的なディテールであったりする。……注意が進展していくことの効果は、覚知対象のみならず、それが結び付き得る諸システム(それらはしだいに広大となっていく)をも新たに創り直す点にある(強調引用者, MM, 115)。

通常の知覚がほとんど記憶でできているからこそ、そこに投射される記憶を拡張し組織化し直すことで、文字どおりもの見え方は変わる。「再創造」による「知的発見」が、記憶の「拡張の努力」(MM, 114)に存するのはそのためである。

問題は、これがどうして生じるのかである。偶然的なきっかけは、準備されたものにとってだけきっかけとなる。システムがどこかで不飽和な状態であること、問題が開いていることが不可欠だ。だが、我々ほど複雑な記憶システムをもってれば、本来はつねに不飽和なはずである。

先ほど記憶の運動は、生の要求に従って安定的な収束を見せると述べた*14。心的システムのかかえる不具合のある程度は、時間が解決するのはそれゆえだ。しかし他方で、創造性を切り拓くということは、多かれ少なかれ意図的に、この生の根源的な傾きに抵抗するのでなければならない。ベルクソンは、「知的な努力」の努力たる所以は、この矛盾、この拮抗にあると説いた*15。

繰り返すが、この知的創造性は、後付けのオプションではない。我々の祖先が、目先の生物功利性に反して記憶による再構成としての認知を始めたその日から、つまり心をもったときから、備わっている可能性である。だから、人工知能に同じものを得させるとするなら、まず生の推力を与え、かつそれに抵抗する可能性を与える必

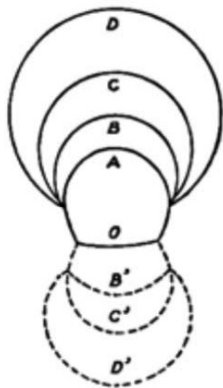


図4 ベルクソン再認における拡張の図 (MM, 115). Oが対象, Aがデフォルトで投射される記憶, つまりAOが通常の再認された対象を指す。そこに投射される記憶をB, C, Dへと拡張するに応じて対象のより深い層B', C', D'に達する

*14 基本的にはそうであるが、そこには「心的性向」の個人差があると彼は言う。経験を既知のパターン認知へと切り詰める「衝動の人」と余分な解釈を盛りがちな「夢見がちな人」がいるというわけである (MM, 170)。

*15 論文「知的努力」は『精神のエネルギー』(原章二訳:平凡社ライブラリー, 2012)所収。

要があるだろう。

知能にとって無からの創造などない。すべての創造は、再創造である。だから自律的に情報を蓄積し、しかもさまざま異なる仕方で再編成・システム化ができるような記憶力を有していること、ベルクソンによればこれこそが、我々のしなやかな知能の源なのである。

◇ 参考文献 ◇

- [デイントン 17] バリー・デイントン:ベルクソンにおける在ること・夢見ること・見ること, in [平井 17a], pp. 122-153 (2017)
- [Goodale 92] Goodale, M. A. and Milner, A. D.: Separate visual pathways for perception and action, *Trends in Neurosciences*, Vol. 15, pp. 20-25 (1992)
- [Graves 16] Graves, A. and Wayne, G., et al.: Hybrid computing using a neural network with dynamic external memory, *Nature* (2016) (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/27732574>)
- [平井 16a] 平井靖史, 藤田尚志, 安孫子信 編:ベルクソン『物質と記憶』を解剖する—現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続, 書肆心水 (2016)
- [平井 16b] 平井靖史:現在の厚みとは何か?—ベルクソンの二重知覚システムと時間存在論, in [平井 16a], pp. 175-203 (2016)
- [平井 17a] 平井靖史, 藤田尚志, 安孫子信 編, ベルクソン『物質と記憶』を診断する—時間経験の哲学・意識の科学・美学・倫理学への展開, 書肆心水 (2017)
- [平井 17b] 平井靖史:〈時間的に拡張された心〉における完了相の働き—ベルクソンにおける汎質論と現象的イメージ, in [平井 17a], pp. 160-185 (2017)
- [平井 18a] 平井靖史, 藤田尚志, 安孫子信 編:ベルクソン『物質と記憶』を再起動する—拡張ベルクソン主義の諸展望, 書肆心水, 近刊 (2018)
- [平井 18b] 平井靖史:『スケールに固有』なものとしての時間経験と心の諸問題, in [森田 18] (2018)
- [カーネマン 14] ダニエル・カーネマン 著, 村井章子 訳:ファスト&スロー 上・下, 早川ノンフィクション文庫 (2014)
- [兼本 16] 兼本浩祐:脳を通して私が生まれるとき, 日本評論社 (2016)
- [Milner 95] Milner, A. D. and Goodale, M. A.: *The Visual Brain in Action*, Oxford (1995)
- [森田 18] 森田邦久 編:現在という謎, 勁草書房, 近刊 (2018)
- [太田 13] 太田宏之, 西田育弘:神経可塑性と状態の生成, 人工知能学会全国大会(第27回)論文集, 2L4-OS-24d-5 (2013)
- [太田 17] 太田宏之:空間的神経表象から時間的圧縮過程へ, in [平井 17a], pp. 226-248 (2017)
- [岡嶋 16] 岡嶋隆佑:ベルクソンにおける収縮概念について—デイントンおよび平井へのリプライ, in [平井 16a], 239-251.
- [スタノヴィッチ 17] キース・E・スタノヴィッチ 著, 木島泰三 訳:現代世界における意思決定と合理性, 太田出版 (2017).
- [Vinyals 16] Vinyals, O., Blundell, C., Lillicrap, T., Kavukcuoglu, K. and Wierstra, D.: *Matching Networks for One Shot Learning* (<https://arxiv.org/abs/1606.04080>) (2016)
- [Yoshida 15] Yoshida, M. and Isa, T.: Signal detection analysis of blindsight in monkeys, *Scientific Reports*, Vol. 5, p. 10755 (2015)

2018年5月21日 受理

著者紹介



平井 靖史

福岡大学人文学部文化学科学教授。東京立大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。